南太平洋海域調査研究報告　No.51（2011年3月）
OCCASIONAL PAPERS　No.51（March 2011）

小規模末端域の共治的地域経営-与路島事例-

長嶋　俊介

鹿児島大学多島圏研究センター

Community Governance at the Peripheral Small Island －Field Study at Yoro Island: South most of the Amami Ooshima Group－

NAGASHIMA Shunsuke

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

Abstract: Yoro Island is a typical small island with a small population that is bound to a single, closely knit community. This offered an excellent opportunity to observe the mutual interactions, relationships, and co-governance between human life and 5 livelihood-environmental elements. Additionally, while Yoro Island is considered as one of the small remote islands of Amami Ōshima, this paper also explores the strong historical relationship with Tokunoshima, the neighbouring island separated by the channel. It also discusses the origins of the 'habu-bo' (a snake pole), history of human migration, and the current state of medical practices for the elderly on the island.

1「道の島」つらなりとしての与路島と歴史-Human ware とHard ware-

与路島は奄美大島の属島（加計呂麻島）のさらに属島である為に、航路条件でも末端地であり、僻遠のさらに末端地としてとらえられやすい。しかし「道の島々」の連なりの例にもれず、隣島である徳之島とは歴史的・人の移動面で連続している。徳之島町井之川北部「山」と与路島が一つの間切り（行政単位）であったことが徳之島民謡「山と与路島節」に残っている。無論直接相互に見える距離でもある。従って、現在の航路や人・経済の流れと同じ視座で、歴史・文化・人に繋がりをとらえる限界を知らしめる好適な例の一つである。

これに加えるに加計呂麻島はかつては通船事業を営む者の多い島であり、今日的産業構造との類推での判断では遠く及ばない海洋移動世界がある。その意味でも今昔対比は意義深い。


写真１．与路島と繋がりのあった徳之島山（サン）側墓地と集落（2010年１月）


写真２．集村集落で台風対策の石垣･低平家屋。蘇鉄林（蘇鉄生産組合もある）とアダン海岸が魅力的

そのような歴史的・地理的特徴を持つ与路島について、徳之島方面（さらにその西方65㎞硫黄鳥島）からの貴重なアクセス機会になったので、人間生活とその近接環境事情について瞥見的要約を記すことにした。人口の小さな地域生活は生活環境との相互作用が顕著にみられる空間なので、人間生活と５生活環境要素をめぐる共治的営みを軸にまとめてみる。

２　人口構造的事情-Human wareと未来世代-

面積は奄美群島の有人島の中で最も小さな島である。また2005年国調人口は137人77世帯、高齢化率50.4%（男性46.0,女性54.1%)、全就労者41人のうち、農業12漁業１建設３で、教育９複合サービス８サービス６公務０医療福祉０という数字が、この地域の現状を如実に示してもいる。また年間観光客数は62人でしかない。ただし限界集落的状況にはなく、肉用牛95頭、０－４歳児１、５－９歳児４、小学生３同教職員７、中学生２同教職員６と地域コミュニティが未来世代の育つ環境を支えている。

３ 地域社会と学校 -Human ware とSpiritual and Ecological ware -

末端島であったことが流人の寺小屋方式教育を実現してきた。小規模末端域でも活発･熱心であった日本教育の原型をここにも見ることができる。

出会った30-40歳代の子育て世代の女性たちに、学校訪問と講演的機会への打診を勧められた。それほど地域と学校の一体感がある。開かれ地域性の象徴が、「はぶ（用心）棒」である。これは隣の請島でも加計呂麻島でもあるがなぜか一般にこの島が代表例とされることが多い。石垣の美しさと密集度と写真被写体としての美観が影響していると思われる。一般には地域合意でのハブ対策と認識されているが、学校教育の「安全・自己保全」教育の一環として、開始されており、それが「独自文化的」に遵守されている。徹底して数が多い。特色ある赤色と、棒数の多さに旅人は驚愕し地域社会の確かさをたたえる。かつて論者もその一人であったが、小島・一集落の結束と地域清浄社会的規律は、外部評価定着による、心地よいミニ緊張感として持続を実現している。周辺の廃棄物管理面でも熱心な取り組みが垣間見られた。




写真３．島の家々は珊瑚石を積み上げて外壁としており、景観上の特徴となっているが、ハブが紛れ込みやすい。街路はいたるところきれいに掃除されている。




写真４．地域リサイクル施設内には堆肥生産と空き缶圧搾機があり、港にも洗浄されたペットボトル類が梱包され積み出しを待っていた。

4 地域社会と出身者 -Human ware と Soft ware-

かつて泊まった民宿のおかみさんは関西からのUターン一家で、電気美術者であった夫の地域貢献を自慢げに語った。地域電化のすべてに関われたことが今でも誇りである。小さな人口では地域にどうかかわった生き方ができるか・できたかは後々までの生活の質を規定している事例である。



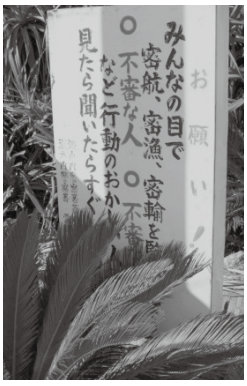



写真５．祖国復帰記念防災晩鐘　自警消防団が地域を守っている。海防拠点の一つでもある。

５　蘇鉄と与路島の歴史 -Economy(Hard ware)とEcological ware-

建てられてまだ新しい蘇鉄の碑があった。そこには蘇鉄生産組合の名前があり、学校には蘇鉄の苗が植えられていた。容器に「蘇鉄の島」とあった。奄美・琉球の歴史、戦中・戦後間もなくの混乱期の食糧事情、そして未来にもつながる食品価値が記されていた。左写真のように斜面を覆う植生は美観的にも美しいものがあり、この島の個性の一つを彩っている。



写真６．蘇鉄の碑

６ 医療福祉事情 - Hard ware と Well being -

都会生活経験者のみならず一般住民にとっても医療・高齢者福祉不安は深刻でコストもばかにならない。月と土１日３便、他は２便、古仁屋から80分の定期船ではかなわない対応には、複数者で海上タクシー（時には島内漁船）を用いる。かつては中心地古仁屋まで共同利用していたが、いまでは加計路麻島内の診療所での対応施設の一部可能となった。具体的には瀬相に徳州会診療所、伊子茂に加計呂麻園という特別養護老人ホームができた。この安心感は絶大で地元評価は想定以上に相当高いものがあった。



写真７.小さな集落なので巡回診療は効率的になされる　無人診療所だが仕組みsoftで補っている。




写真８．定期訪問健診チームは海上タクシーでの訪問　介助されながら老人が載る別海上タクシー

６ 島ごとの歴史・文化・博物の展示 - Spiritual wareと Soft & Ecological ware -

島にありながら島のことがその島だけではわからない。正確に伝わらない。蓄積していかない。中心部古仁屋の学芸委員（他の地域例に比して、その存在意義は絶大だが、それ）のみに頼る保存であるとしたら、特に次世代（小中学生10名程かそれにも満たない状態が続いているがかろうじて併設校が保持されている）が高校からは島から通うことに制約の多い末端島の未来への継承には課題が多く残されることになる。ここでも口永良部島方式(学校内博物･歴史民俗資料館づくり)を試みることの社会的意義が大きい。

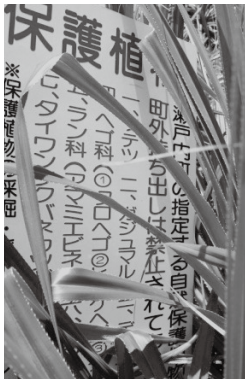





写真９－11．植生の保全（左）　海に連なるアダントンネル（中央）　景勝地として知られるハンミャ島（無人島)(右)

７ 産業立地と未来可能性

この島にはノエビア（化粧品メーカー）の研究施設が1990年代初めころからあり、トカラ列島付近の海水を利用した製品を加工しているといわれるが、主として社員のダイビングや保養の拠点的利用とみられている。鹿児島空港に彼ら利用のヘリコプターも常駐しているようである。写真手前は焼酎製造用の甕類とも見られる。末端知的性静穏な環境とコミュニティの健在、そして隣の請島とすら自然の様子が若干異なる、奄美大島と徳之島に見られる特徴の混在か指摘されているその魅力・・これらは、遠隔的桃源郷的新しい魅力でもありうる。長期滞在型遠隔離島の利用事例として定着することを願うものである。

なおこの島にも光通信の波が届き始めている。調査時点ではすでに当大学の情報基盤

センターサポートの通信実験（下右写真）が開始されていた。遠隔地即デジタルディバイドの時代は終焉期を迎えていた。





写真12. 産業立地と未来可能性に関する写真